

カントにおける経験の可能性

森 本 義 裕

—

空間と時間、そしてカテゴリー、これらはカントにおいて認識の重要な要素であり、これらの直観と概念の共同によつて我々の認識は成り立つとされる。これらは認識のア・プリオリな要素であり、経験さえをも可能ならしめるものである。「我々のすべての認識は経験とともに始まる」¹⁾のではあるけれども、単なる感覚経験からは脈絡ある統一的経験は生じえず、時空やカテゴリーといった認識のア・プリオリな要素があつてこそ初めてそのような経験が可能となるのである。

我々は、空間と時間に関しては、その客観的妥当性をカント同様容易に認めることができるであろう。「感性的直観の諸対象が、心の内にア・プリオリに潜んでいる感性的形式的諸条件に適合しなければならぬ」ということは、さもなければそれら

は我々にとつての対象とはならないにちがいないということから明らかである²⁾。ところがカテゴリーに関しては、事はそう簡単ではない。カテゴリーの客観的妥当性の権利を問うたのが「演繹論」であるが、その問いは根本的には次のような前提に基づいている。「諸現象は、それらが悟性の統一の諸条件に全く適合しないことを悟性が見出すような性質のものであり、そしてすべてが混乱しているので、たとえば諸現象の系列の内には、総合の規則を手渡してくれるようなものは全く現れず、だから原因と結果という概念に対応するものも全く現れず、それゆえこの概念は全く空虚で、無価値で、無意味である」ということが、もしかするとありうるかもしれない³⁾。カントは、現象が悟性の統一の諸条件(カテゴリー)に関わりなく無法則に現れるかもしれないのに、なぜカテゴリーが客観的妥当性を持つと言いつたのかと問うているのである。周知のように、カントはこの問いに「経験の可能性」をもつて答えている。カテゴリー

が現象に対して客観的妥当性を持たなければ経験が不可能であるというのである。現象はすでに見たように悟性とは全く無関係に与えられるのであり、その場合、諸表象の系列は全く出鱈目で、たとえば今日東京であったものが明日はパリになり、次にはニューヨークになるということもありうるであろう。カントの述べている例を用いるならば、「辰砂 (Zinnober) が、ある時は赤くある時は黒く、ある時は軽くある時は重いものであったり、人間が、ある時はこの動物の姿に、ある時はあの動物の姿に変化したり、夏至になって土地が、ある時は作物で、ある時は氷や雪でおおわれたりする」こともありうるであろう。その場合、現象は「諸表象の盲目的な戯れ」となり、「夢にすらおよばない」ものとなってしまふのである。このような「諸現象の混迷 (Gewahl)」⁽⁷⁾ について語る時、カントはヒュームが考えていたような知覚の系列を根本から否定している。カントによれば、現象はそれ自体では全く混乱しており、どのような方法でもそこから概念を引き出すことなどできないようなものである。現象がカテゴリーにしたがって生ずることによってこそ初めてヒュームが考えていたような知覚の系列さえ生じうるのである。この現象がカテゴリーにしたがって生ずるということこそカテゴリーが客観的妥当性を持つということに他ならない。

現象は悟性と関係なく与えられるものではある。少なくともその最初の現れにおいては悟性とは関わりがない。したがって、現象は完全に悟性によって構成されたものではない。けれども、悟性が現象の混乱を言わば予防し、構想力を介して秩序づけられた現象を構成した場合にのみ経験は可能である。カントは、当初現象と悟性は関係がないという前提から「演繹論」を出発させたが、最終的には悟性が現象の根底に働いているという結論を出すに至ったと思われる。

本稿では、構想力論を中心に現象の現れ方を考察する。それによって、カテゴリーが現象の根底にあつてそれを構成しているのだから経験が可能でないということを、少なくとも明確にしたい。カテゴリーが現象を構成しなければ、現象は全く混乱し、経験が不可能であるということを指摘することが本稿の主旨である。

二

我々は日常次のような経験をしてはいないだろうか。田舎をドライブしていると、何とも言いようのない美しい景色に出会い、それを覚えていて、何日かたった後にもう一度その景色を見ようとしてその場に行ったが、同じ景色なのに何となく色あせて見えた。あるいは、街を歩いていて、ある店ですべて心を刺激するようなきらびやかなライターを見つけたので、買った。そして家に持ち帰ってそれを見て楽しんでいたが、そのうちに何も感じなくなつてあきてしまった。あるいは、ある日道を歩いていると、とても美しい建物を見つけた。その後その建物をもう一度見に行つたところ、確かに同じ建物なのに、最初に見

た時と全然違うという気がした。夏目漱石は第一印象を失うまいとして、ロンドン塔を二度と見まいと考えたが、彼には二度目の印象が最初の印象と違うということがわかっていたのである。我々の日常経験もそれを示している。第一印象は本当に生々しく、我々に迫ってくるのに、二度目に見た時にはその生氣は失われ、我々に何の刺激も与えないというものの例はいくらでも見つかるであろう。これは二度目の印象が再生産された表象であることを示している。カントは第一版の「演繹論」で「現象の再生産」について何度もくり返し語っている（たとえばA101, A108, A124など）。もし現象が再生産されるとしたならば、それはどのような理由によるのであろうか。答えは、「現象がないため」である。一見奇妙に思われる事であるけれども、現象が欠如するからこそ現象の再生産が必要なのである。カントは、感覚がしだいに減少しついに消滅するであろうことを予想している。「すべての感覚は度あるいは量を持つているのであり、これによって感覚は同一の時間を、すなわちある対象の同一の表象に関する内的感官を、その感覚が無（ $\Pi 0$ 否定）において消滅するに至るまで、多かれ少なかれ充実することができる」⁽⁹⁾。「すべての感覚は減少しうるものであり、したがってすべての感覚は減少してゆき、そうして徐々に消滅しうるものである」⁽¹⁰⁾。感覚がなければ、「現象がない」と言つてよいであろう。カントも、「経験的直観において感覚に対応するものは実在性（現象的実在性）であり、感覚の欠如に対応するものは否定性 $\Pi 0$ である」⁽¹¹⁾ とか「ある瞬間における感覚の欠如はその瞬

間を、空虚として、したがって $\Pi 0$ として表象するであろう」⁽¹²⁾ と述べている。感覚は現象の質料であるから、これがなくなれば現象はないと言つてよい。カントは感覚が完全に消滅すると断定しているわけではないが、ほとんど疑い得ないことと考えているように思われる。この感覚の欠如を構想力が補うとは考えられないであろうか。

「現象において感覚に対応するところのものは、諸物自体（事象性、実在性）としてのすべての対象の超越論的質料である」⁽¹³⁾。感覚は物自体を表示する。「我々がある対象によって触発されるかぎり、その対象の表象能力への作用は感覚である」⁽¹⁴⁾ とカントが述べているように、感覚は、対象（ここでは物自体のことであると考えられる）によって我々の心（表象能力）が触発されるかぎりにおいて生ずるものであり、それゆえ物自体に対応しかつ物自体を表示するものである。我々はとりわけ「触発されるかぎり（sollen）」という表現に注意しなければならない。感覚は我々が触発されている間だけか生じないということである。物自体が我々の心を触発するのは非時空的次元での事柄であるが、時空的世界にひきうつされても、我々は同一の自己を持つものとして「主観が触発されている」ということを意識している。この触発は長く続く場合もあるが（いつ見ても美しい宝石のように）、先に見た例のように何も感じなくなつてしまふ場合もある。そのような時は感覚も消滅しているのである。もとより超越的世界と時空的世界との関係は不明であるが、少なくとも今述べたことは言えるであろう。超越触発の意識は感

性的世界にもひきうつされ、感覚は物自体を表示する。そして原因は不明であるが、時間的に見て、触発が長く続く場合もあれば、そうでない場合もあるのである。

第一印象と第二印象が全く違うこともあれば、たいして変わらないこともある。またたく間に新鮮さが失われる場合もあれば徐々にそうなる場合もある。いずれにしても言えることは、鮮度や力強さが完全に失われた時には感覚は消滅しているということである。同じ色でも見ているうちに次第に鮮やかさを感じなくなってしまう、ついには完全にあきってしまうということがある。その場合、それと平行して触発の度もうすれ、感覚も減じている(度を減じている)のである。それにもかかわらず、その色はいつまでも変わらない色でありつづける。それは、構想力が感覚の度の減じた分だけ感覚を再生産しているからである。感覚の度とは感覚の度合いのことであり、感覚の度が弱まるにつれて感覚そのものが失われる。たとえば赤という色について考えてみると、赤といつても何十種類もの赤がある。しかしこれは感覚の質である。その何十種類もの赤はそれぞれに度を持つており、度が弱まるとその赤も弱くなり、やがては消滅してしまう。構想力による感覚の再生産は、感覚の消滅と反比例の関係にある時であれば(先の同一の色の例)、そうでない時もある(たとえば、たいへんうるさい騒音がやがて気にならなくなるような場合で、この場合、音の再生産があまり行われていない)。あるいはまた、感覚が最初から欠如していて、全くの無から行われる場合もある。たとえば、朝目が醒めた時、

いつもと全く同じ物に取り巻かれていたため何の触発も感覚も生じないような場合である。このような場合、構想力による感覚の再生産は「最初は純粹直観¹⁶⁾ 0」というところから始まって、感覚の任意の量に至る」のであり、これによって部屋の現象を再現するのである。感覚は触発に媒介されるが、対象そのものの性質ではなく、対象を表示するけれども「単なる主観的表象¹⁷⁾」であり、主観の変様ないしは規定であつて、本来主観から出たものである。同じ主観に属する構想¹⁸⁾が感覚を再現したとしても少しも不思議ではあるまい。構想力によって再現された感覚は、もはや鮮やかさも力もないものであるが、経験の対象の可能性のためには必要不可欠のものである。

三

「対象一般についての諸概念¹⁸⁾」であるカテゴリーは、「ア・プリオリな条件として、すべての経験的認識の根底に潜んでいる」。カテゴリーが現象にア・プリオリに先行することなくしては「何ひとつ経験の客観として可能でない²⁰⁾」のであり、カテゴリーが経験の対象を可能にし、またすべての経験的認識すなわち経験を可能にするのである。

「すべての表象は、表象として、自らの対象を持つが、それ自身再び他の表象の対象となりうる²¹⁾」。物自体としての「対象に直接的に連関するものは、直観と呼ばれる²²⁾」が、これは感覚を通じてであつて、感覚は「実在的なもの²³⁾」として、物自体を

表示する。物自体を表示するからこそ「実在的」である。この感覚は「超越論的对象」(物自体)をそれ自身の対象として持つが、それ自身再び他の表象の対象となりうる。この「他の表象」とは構想力の再生産的表象のこととさしあたり考えることができる。たとえばある物体が我々に最初に現れる時、その物体は白く、硬く、冷たく、重く、たたくと高音を発したとする。これらの感覚はやがて消滅してしまうであろうが、構想力の目差す対象となりうる。感覚が消滅した時、構想力によって再生産された白さ、硬さ、冷たさ、重さ、高音が我々に与えられるためである。これらの再生産的表象はある物体の概念のもとに原初的感覚共々結合され、一つの対象を我々に提示する。このような構想力による諸表象の結合は、ある統一の規則にしたがっているものであり、その規則となるものがカテゴリーである。今の例の場合、物体の概念の根底には実体 (Substanz) のカテゴリーが潜んでいる。「主語としては現存しうるが、単なる述語としては決して現存しえないあるもの」としての実体の概念がなければ、先の諸表象が一つの対象において述語として結合されることは不可能だからである。カントにおいて、実体は単なる主語として現存するものを意味するだけでなく、現象における持続的な基体 (Substrat) をも意味する。そして実体の諸規定すなわち偶有性 (Azidenz) は、この持続的な基体の述語である。さらに、この偶有性 (実体の諸状態) は何の原因もなく変化することはない。このような実体とその偶有性のカテゴリーが諸表象の統一に重要な役割を果たしている。実体

のカテゴリーはある物体の概念の根底にあり、諸表象をその物体の述語 (偶有性) としてその物体の概念のもとに結合する。そしてそれらの諸表象は何らの原因もなく変化するということはない。

それでは、実体や因果性の概念がなかったとすれば、現象はどのようなのであろうか。白く、硬く、冷たく、重い物体は、次には青く、やわらかく、温かく、軽い物体に変わるであろう。それどころか物体でさえもないものにも変わりうるであろう。最初石であったものが水になり、次には人間に変わり、さらには木になるであろう。構想力の再生産的綜合が統一の規則にしたがわなかったためである。そのような場合、現象は諸知覚の狂詩曲となり、とても経験などと呼べるようなものにはなりえない。人間関係も不可能である。あるいはカントも述べているように、「ある種の言葉が、ある時はこの物に、ある時はあの物に与えられたり、あるいはまた、同一の物があれやこれやと名づけ変えられる」ことになるであろう。ある物体に「これこれ」の名称を与えた後に、その物体が全然別の物体に変化していった場合、一つの言葉が様々な物体に対して用いられることになるし、あるいはまた、一つの物体が様々な物体に変化した場合、我々は一つの同一の物体を様々な名称で呼ぶことになるであろうということである。前者の場合、豚という言葉が人間や鳥や花にも用いられるであろうし、後者の場合、一つの同一の豚が人間と呼ばれたり花と呼ばれたりするのである。このようなことではいかなるコミュニケーションも成り立ちえない。

そしてさらに、すべてのものがわけもなく目まぐるしく変化したのでは、我々はいかなる固定的な概念も持ちえないことになるであろう。

以上のように考えてみると、カテゴリーが対象一般の概念として、すべての現象に必然的に先行するとカントが考えたのは一応はうなずけるであろう。カテゴリーは、現象の必然的制約として、すべての現象にア・プリオリに先行し、経験の対象を可能ならしめ、つまり経験一般を可能ならしめる（経験の対象とは経験的認識の対象一般を意味しうる。カテゴリーは、対象一般の概念として、経験的認識一般すなわち経験一般を可能にする）。カテゴリーが現象に先行しなければ、一切の知覚が混乱し、夢にさえおよばないものとなるのである。実体のカテゴリーがないというだけでも、あらゆる物体あるいは物質は次々と変化すると考えられるだろう。物体や物質に恒存性が全く与えられないからである。それに加えて因果性のカテゴリーがなかったとしたらなおさらである。本節では、構想力がカテゴリーにしたがわぬ場合の現象の混乱について先行的に指摘した。けれども、ここにはなお残された問題がある。感覚は我々に決して物の形態（*Gestalt*）を提示することはない。再生産された感覚も全く同様である。感覚は空間表象と全く関係がないのである。感覚は現象の質料を成すだけであり、現象の形式は感覚と別個に考察されなければならない。それでは、そもそも物体の形態はいかにして与えられるのであろうか。カテゴリーによる現象の構成について述べる前に、我々は構想力についても

う少し立ち入って考察しなければならない。

四

カントは「感性論」の初めに次のように述べている。「もし私が物体の表象から、悟性がそれについて思考するもの、たとえば、実体、力、分割可能性などを、同様に、感覚に属するもの、たとえば、不可入性、硬さ、色などを分離したとしても、私にはこの経験的直観からなおあるものが、すなわち拡がりと形態が残存する。これらの拡がり²⁷⁾と形態は純粹直観に属し、純粹直観は、感官あるいは感覚の現実的对象なしですら、感性の単なる形式として心（*Geist*）の内にア・プリオリに生じるのである」。拡がり（*Ausdehnung*）と形態は純粹直観に属し、感覚とは関わりなく心の内にア・プリオリに生ずるとカントは明言している。ではその純粹直観はいかにして生ずるのであろうか。

しばしば指摘されるように²⁸⁾、「純粹理性批判」には二種類の空間が登場する。一つは「感性論」に見られる唯一全体空間であり、この空間では全体が部分に先行する。もう一つは、「分析論」とりわけ「直観の公理」において明瞭に説かれる外延量としての空間、すなわち部分が全体に先行し、全体が部分によって合成される空間である。私見では、この二つの空間は矛盾するものではなく、むしろ後者は前者に含まれるものである。

「対象として表象される空間（実際に幾何学において必要と

されるような)は、単なる直観の形式以上のものを、すなわち、感性の形式にしたがって与えられた多様の一つの直観的表象における総括を含んでおり、それゆえ直観の形式は単に多様を与えるにすぎないが、形式的直観は表象の統一を与える。この「演繹論」第二版からの引用には「直観の形式 (die Form der Anschauung)」と「形式的直観 (die formale Anschauung)」という二つの直観が出てくるが、これは空間についてだけ述べているのではなく、時間についても同様に考えられている。それはこの引用の後につづく文章から察せられることなのであるが、本稿では「応空間に話をかざることにする。結論的に言うならば、「直観の形式」としての空間は感性の根源的形式としての唯一全体空間であり、この「直観の形式」としての空間を外延量としての空間が規定したものが「形式的直観」としての空間に他ならない(「感性論」ではこの「形式的直観」としての唯一全体空間が語られている)。

「感覚自体においては、空間に関する直観も時間に関する直観も見出されない」のであり、感覚は触発によって空間とは別個に生ずるものである。この感覚を「直観の形式」としての全体空間がまず受容し、ここに「現象の多様」が生ずる。この多様は感覚の多様であり、感覚の雑多である。この多様においては、すべてが一緒になってくっついており、形態や大きさも与えられず、それぞれの位置や相互関係もない。言わば「絶対的統一³²」であって、未だ何らの空間的規定も与えられていない。単に唯一全体空間の中にあるだけである。このような「直観の

形式」を規定してゆくものが外延量としての空間である。外延量とは「部分の表象が全体の表象を可能にする(したがって必然的に前者が後者に先行する)」ような量であり、全体が部分の合成によって成立するものである。カントは、「直観の公理」において、外延量は部分の集合 (Aggregat) であり、また外延量としての直観は、現象の把握 (Apprehension) における諸部分の継起的 (successiv) 総合によって成立するとした上で、次のように述べている。「諸形態の産出におけるこのような生産的構想力の継起的総合に、拡がりに関する数字(幾何学)はその諸公理とともに根拠づけられている」。形態は当然拡がりを含んでおり、したがって空間の産出なくしては形態の産出はありえない。形態は拡がり³³と外的な面や線や点から成り立つが、点が線の限界であり、線が面の限界であり、面が空間の限界である以上、形態は空間的拡がりの上に成り立っている。カントは今の引用で構想力が諸形態を産出すると述べているのであるから、構想力が空間を産出すると述べているのである。そのような空間の産出は、諸部分の継起的総合によって行われ、外延量としての空間を形成する。しかもその形成は現象の把握において、把握の継起的総合において行われることになる。把握とは感覚に対して空間が適用されることであり、把握の総合によって感覚は初めて知覚の対象となる。構想力の産出する諸形態は単に幾何学的形態ばかりではなく、ありとあらゆる形態を普遍的に描きうるのであり(この点については後述する)、構想力は空間の産出によって一語になつている諸感覚をひきは

なし、それぞれの相互位置を定めるとともに、諸感覚に形態や大きさをも与えるのである。そのようにして、把握の綜合は感覺を初めて知覚対象たらしめる。構想力の綜合は外延量としての空間を形成するが、諸部分空間は互にくっついており、間隙はない。部分空間の限界は面や線や点として直観される。個々の部分空間自体が綜合によって成り立ち、つまりさらに小さな部分空間によって成り立つが、要するに、それを一まとまりと見るかという直観の仕方によって物の形態が直観されるのである。構想力は諸感覚の間に空間を差し挟むことによって諸感覺をひきはなし、形態や位置を与えるが、感覺のない空間というものはない。物体のない空間にも光や闇や空気抵抗がある。構想力は物体のない空間にも何らかの感覺を把握して入れているのである。純粹直観とは感覺を捨象した表現にすぎない。³⁵ 把握の綜合は、純粹綜合としては「直観の形式」を規定し、これによって「直観の形式」は「形式的直観」へと生成する。「形式的直観」は「直観の形式」を基礎としているから唯一全体空間である。また「形式的直観」は、「直観の形式」において外延量としての空間が無際限に（*arzenaios*）進行しうることから、「無限量」として表象される。「直観の形式」、外延量としての空間、「形式的直観」はいずれも純粹直観であり、三次元である。また、これらはいずれも「感性的形式」であり、「感官の形式」（外的感官の形式）であり、「現象の形式」であり、「感性的直観の形式」である。³⁷

綜合一般は「構想力の単なる作用であり、魂（*Seele*）の不

可欠ではあるが盲目的な機能の単なる作用であって、この機能なくしては我々はいかなる認識も決して持つことができないであろうが、我々はこの機能を意識するだけでさえ稀である。³⁸

構想力は魂の盲目的な機能であり、我々はこの機能やその作用を意識することはほとんど全くない。事実、我々が気づいた時には、我々はすでに具体的な形象（*Bild*）の前に身を置いている（綜合は形象の成立する以前に行われているのであるが）。「私は直接的に諸知覚で行使された構想力の働きを把握と名づける。すなわち構想力は直観の多様を一つの形象へともたらずべきである。だから、構想力は諸印象を自己の活動の内へとあらかじめ取りこまなければならぬ、すなわち把握しなければならぬ。³⁹ 構想力の綜合は我々の意識下で行われ、感覺印象に形態等を与え、形象たらしめる。そして構想力の形態産出作用は普遍的であり、たとえば、四足獣の形態を、「経験が私に提示する何らかの唯一の特殊な形態や、あるいはまた、私が具体的に描出することのできるあらゆる可能的な形象に制限されることなく、普遍的に描きうる」のである。⁴⁰ つまり、経験がこれまで我々に提示してきたすべての形態や、我々が記憶や創造から描き出しうるあらゆる可能的な形態に制限されることなく、我々の想像を絶した形態をも産出するのである。これは純粹形態の根源的投げ入れであり、自然が我々に提示するすべての形態は我々の意識下で構想力が投げ入れたものであって、我々はそれを後で自然から学ぶのである。構想力は純粹空間の産出を通じてこの世に初めて形態を生み出すのであり、感覺は

我々に決して物の形態を提示することはない。

五

カントは「演繹論」第二版で構想力を次のように定義している。「構想力は、対象を、その対象の現在（Gegenwart）なしでさえ、直観において表象する能力である」⁽⁴¹⁾。構想力は「直観において」対象を表象するのであって、単なる想像において表象するのではない。しかも「対象の現在なしでさえ」表象するのであって、これは現象の欠如した状態を意味する。感覚が消滅して現象がない場合に、構想力は対象を直観において現前せしめるのである。そしてカントはこのような構想力を、それが自発性に基づいていることから生産的構想力と呼び、心理学に属すべき再生産的構想力と区別している。後者は、「演繹論」第二版ではこの個所を含めて少なくとも二箇所に出ているが、⁽⁴²⁾連想の法則にしたがい主観的妥当性しか持たないものと考えられている。「演繹論」第一版の構想力論は第二版のそれと本質的には変わらないのであるが、叙述があまりにも混乱をきわめているため、心理学的な構想力と混同される恐れがあると思ひ、カントは第二版でさっぱりとこの誤解を峻拒したのである。要するに、生産的構想力も経験的表象の再生産を行うが、それは次の三点で再生産的構想力の行う再生産と区別される。第一に、前者の行う再生産は現実現象を産出するのであるが、後者のそれは、たとえその表象が我々にどれほど強い印象を与え

るものであったとしても、夢や妄想と呼ばれ、非現実の対象ではない。第二に、後者の再生産的表象は質料と形式の区別を考慮に入れずに理解されているが、前者の場合は感覚の再生産と形式の再生産（純粹再生産）の複合体として理解されている。第三に、前者の再生産も連想の法則と一致することがあるが、あくまでも客観的根拠（カテゴリー）に基づいているため、主観的根拠しか持たない後者の連想とは異なるということである。以上の三点で両者は区別されると思われるが、結局両者は重複する部分があるので誤解されやすいとは言いえよう。第一版では「生産的構想力」という言葉も滅多に使われず、再生産に関する叙述も誤解を招きやすいものである（特に今の第二点⁽⁴³⁾がほとんど意識されていない場合が多い）。けれどもカントは生産的構想力について語っているのである。カントは、構想力の「再生産的能力」とか「経験的使用」といった表現を用いているが、これらの表現は複雑な事態を説明するには十分とはいえず、かえって事態を複雑にしている。むしろ第二版の区別の上で生産的構想力は適切に理解されよう。本稿では生産的構想力について語っているのであるが、カントはあまり生産的構想力という言葉が多用しないので、カントにならって単に構想力と言っているのである。生産的構想力の再生産作用は、それが生産的構想力から出ているゆえ生産的構想力の作用ではあるが、この作用を持つゆえに生産的構想力という名称自体があまり的をえていないとも言いえよう（もつとも、この再生産作用は現象を生産するから生産的のと言えるのかもしれない）。

構想力は「直観の形式」において諸感覚が与えられている場合（この場合は「対象の現在なしでさえ」というのとはやや異なる）、純粹空間によってこれを把握するが、カントは把握を構想力の「經驗的使用」に数えている。感覚という經驗的なものに関わるからである。把握は、感覚に媒介されるにすぎず、一瞬間をしか満たさない⁽⁴⁶⁾。個々の把握は部分的であり、それぞれの把握は一瞬にして次の部分へと移行する。把握は「絶対的統一」のある一部分から初まって次第に全体へとおよぶが、個々の把握は瞬間的であり、部分的である。そして、把握が移行してゆく間に、前に把握された部分は消滅してゆく。感覚も消滅してゆくし、純粹空間も同様である。したがって、把握の綜合は再生産の綜合と結びついている。前に把握された部分がなくなってしまうのは把握の綜合が不可能だからである。再生産は、一方において把握の純粹再生産であり、これなくしては「空間と時間という最も純粹な第一根本表象さえ決して生じえないであろう⁽⁴⁷⁾」。したがって、把握の純粹綜合は純粹再生産と結びついている。再生産は、他方において感覚の再生産であり、感覚の減少の度に応じて感覚が再生産される。そしてこの再生産的感覚は、やはり再生産され続けている純粹空間によって把握され続ける（再生産された感覚は、原初的感覚同様、全く空間性を持たない）。このようにして、再生産の綜合を伴って初めて把握の綜合は可能となり、ここに形象が成立する。「形象は生産的構想力の經驗的能力の産物である」とカントが言う場合、この「經驗的能力」は、把握ならびに空間の純粹再生産、

そして印象の再生産の三者を意味していると言えよう。「絶対的統一」は外的感官の「概観作用（Synopsis）」において一瞬にして与えられる。この統一は一つの全体であり、諸部分は把握において捉えられる。把握は瞬間ごとくに他の部分に移行し、「直観の形式」の中で一つの外延量としての空間を形成する。我々は、構想力の綜合を意識することが稀にある。たとえば、初めて見る町並は、最初一つの統一体として与えられ、我々の直前に迫ってくる。この統一体は「直観の形式」の中に受容されてはいるのであるが、全く空間的に理解できない単なる全体である。色や音や匂いは一緒になつてくついついており、それらがどのような空間的位置を持つのかは無規定である。「外的感官（我々の心の一つの固有性）を介して我々は、諸対象を我々の外なるものとして表象し、そしてこれらを総じて空間において表象する。この空間において、それらの形態、大きさ、相互関係が規定されているか、あるいは規定可能（bestimmbar）である⁽⁴⁸⁾」。未だ規定可能な状態である統一体を純粹空間が規定する。構想力は色、音、匂いなどを我々から押しつけ（これらの感覚と我々の心の間に空間を差し挟むことによる）、さらに諸感覚の間に割り込み、これらをひきはなす。それぞれの感覚は「直観の形式」の中で様々な所へ運ばれ、空間的に位置づけられる。ある音は、最初どこから聞こえてきたのかわからなかったのであるが、車の形態を与えられた色の方へ運ばれてゆく。匂いも、どこからくるのかわからなかったのに、花の形態を与えられた色の方へ運ばれてゆく。様々な感覚が、前後、左右、

上下等の空間的相互関係において秩序づけられ、それによって初めて一つの町並の形象が我々に与えられる。

このように、我々は初めて見るものにおいて把握の綜合を意識することも稀にあるが、初めての場合でも意識しないことの方がよほど多い。また、把握の綜合には色々な場合があると考えられ、たとえば、毎日見ているもののような場合、すべての感覚が消滅しており、その場合「絶対的統一」は与えられず、「直観の形式」を基礎にして、印象の再生産と純粹空間の再生産が同時に行われると考えられる。把握の綜合は感覚の度に応じて様々でありうる。さらに、把握の綜合によって既に形象が成立している場合に、新たな感覚が生じて、これをまた構想力が秩序づけるといふこともある。把握の綜合は多重的でありうる。大きな形象を形成する綜合自体が、小さな形象を形成する綜合の合成体でもある（これは多重的ではないが）。大きな形象は綜合の反復によって成立している。また、我々は二度目に何かを見た時、感覚印象だけでなく形態や位置さえ変わっていると思う時がある。これは把握のされ方が少し変わったといふことである。純粹表象の生産・再生産のされ方も様々であり、構想力の盲目的な作用であるから、把握作用の実態を明らかにすることは困難であろう。いずれにしても、はっきりと言わなければならぬことは、質料と形式とはどのような場合でも明確に区別されなくてはならないということである。⁵²

六

構想力の綜合について必要上長々と考察してきたが、我々にとって本来の課題は経験の可能性であった。構想力がカテゴリーにしたがわれないと経験が可能でないということは第三節であらかじめ注目しておいたが、ここで再び総括的に考察することにする。

第一に、量のカテゴリーがなければ、そもそも空間が構成されない。量のカテゴリーならびにそこから生ずる「直観の公理」の原則にしたがってのみ空間は構成される。単一性、数多性、総体性へと進行する外延量としての空間は量のカテゴリーに基づいており、つまり「直観の公理」の原則自体が量のカテゴリーに基づいている。そしてこの原則がなければ、たとえば構想力はいきなり巨大な空間を描出してしまいかもしれず、その場合、いかなる個別的形態も相互関係も生じえないであろう。カントは、外延量としての空間の構成が量のカテゴリーに基づいていることを家の知覚の例で説明している。⁵³

第二に、質のカテゴリーがなければ、感覚の再生産が無秩序になり、我々は生きてゆけないであろう。質のカテゴリーとそこから生ずる「知覚の予料」の原則に基づいてのみ、秩序ある感覚の再生産が可能である。原初的感覚は、把握において、それぞれ別々に内包量（度）として我々に与えられるが、この実在性は徐々に減少し（制限され）、否定性へと至る。この実在性↓制限性↓否定性という移行過程の逆をゆくのが構想力であ

る。構想力は否定性から出発し、原初的感覚の減少と対応してそれを補充してゆき、ついには再生産的印象が原初的印象と完全に入れかわることになる。第二節で述べたように、厳密な対応関係にない場合もある。このような構想力の作用は、原初的感覚の減少の度に応じて再生産的表象の度をア・プリオリに規定する原則に基づいており、またこの原則は質のカテゴリーに基づいている。原初的諸感覚は、それぞれが別々に内包量として我々に与えられ、それぞれが別々に減少し、それぞれが別々に再生産される。もしも質のカテゴリーと「知覚の予料」の原則がなかったならば、感覚の再生産は全く無秩序になり、通常の度を越して、ものすごい熱や光や音が我々に襲いかかり、我々は生きてゆけないことになるかもしれない。

第三に、関係のカテゴリーとそこから生ずる「経験の類推」の原則がなければ、持続的な物質も、それらの共在も、またいかなる法則的な変化も不可能となる。実体持続の原則がなければ持続的な物質あるいは物体は生じえず、また因果性の原則がなければすべての変化はその原因を持たなくてもよいことになり、その通り、すべてのものが理由もなく変化するであろう。さらに、相互性の原則がなければ諸実体の共在（同時存在）が表象されえない。

第四に、様相のカテゴリーとそこから生ずる「経験的思考一般の要請」の原則がなければ、現実と非現実が区別されず、一つの統一的経験は不可能となろう。可能性の要請によって、我々の表象は、経験の形式的条件（直観ならびに概念から見ての）

によって吟味され、可能あるいは不可能と判断されるが、夢や妄想はしばしばこの可能性の要請を通過しうる。では現実と非現実との区別はどのようにしてつけられるのかと言えば、この区別はひとえに超越論的対象（物自体）との連関にかかっている。構想力の再生産的表象は、物自体の直接的表象である原初的感覚と、経験の類推の諸原則にしたがって連関する場合にのみ、物自体を表示する。カントは質料的には観念論者でない。原初的感覚は「あるもの一般 $\parallel X$ 」⁽⁵⁴⁾としての物自体を表示するが、この感覚はまた他の表象（再生産的印象、純粹空間の多様、感覚についての経験的概念など）の対象となりうる。再生産的印象は物自体を表示するかぎりにおいて実在的である。超越論的対象という純粹概念は、「あらゆる我々の経験的概念一般に、対象との連関を、すなわち客観的実在性を与えるものである」⁽⁵⁵⁾。そして、そのような物自体との連関、すなわち客観的実在性は、諸現象がカテゴリーにしたがって統一されることに基づくと言われている。すなわち、すべての再生産的表象はカテゴリーにしたがうかぎり、物自体を表示し、客観的に実在的である。夢や妄想は、カテゴリーにしたがわないゆえ非現実と判断される。カントはあくまでも形式的観念論者である。印象はカテゴリーにしたがうかぎり実在的である。純粹表象もカテゴリーにしたがって与えられるかぎり経験的に実在的であり、すなわち客観的妥当性（実在性）を持つ。こうして現実性の要請は、経験の諸類推を通じて対象の直接的表象（原初的知覚）と連関するものを現実的なものとみなす。しかしながら、夢や妄

想には現実性の要請をも通過するものがあり、たとえば、ある人とどこかで出会ったのが夢であったのか現実であったのか、相手に聞いてもよく覚えていないというような場合、現実か非現実かわからない。しかし我々にはなお必然性の要請があり、どちらが現実だかわからない場合でも、どちらか一方が現実であると我々に思考させる。この必然性は結果の必然性であり、この必然性は相矛盾する二つの結果を容認しないゆえ、それ自体では矛盾しない現実がいくつあるかと、それらが互いに矛盾する場合、それらの内のどれか一つが現実であると我々に思考させる。もとよりどれが現実であるかは決定しえないが、この要請は相矛盾する因果系列を認めないので、一つの経験を構成するためには欠かせないものである。

以上、カテゴリーと原則について簡単に見てきたが、原則の使用は多様でありえ、ここでは単に経験自体を構成する場合の原則の使用について触れたにすぎない。カテゴリーも原則も、基本的には経験の成立以前に意識下で働くものであろう。我々は総合を通じて自我が強められた時、総合の結果として生じた対象を意識しうるにすぎない。総合の意識は総合そのものの意識ではなくて、総合を通じて強められ統一された意識である。意識はもとより全く無なものではなく、総合の最初からきわめて微弱ながら与えられてはいるが、総合を通じてのみ強められると言えよう。したがって総合そのものは、そのようなわけで、意識下の出来事である。把握は我々には意識されず、我々は把握の総合の結果として生じた直観的諸対象を意識するだけであ

る。たとえば、一つの部屋の形象が成立する際、個々の物体はそれぞれが総合の結果として意識されるが、総合そのものはいつでも意識されていない。つまり、一つ一つの小さな形象が総合によって形成される度ごとに、その形象は意識され、何らかの形態において直観されるが、総合そのものは、どれだけそれが進展しようと意識されることはない。我々は日常、総合の結果として生じた諸物だけを意識しているのである。総合は、把握における諸空間を総合し、我々に一つのまとまりある空間(形態)を意識の対象たらしめる。そのようにして、諸感覚は把握の総合を通じて知覚対象たらしめられるのである。けれども、個々の把握や綜合作用自体が意識されることはきわめて稀であると言ふことができる。

七

我々は、初めて何かにさわった時、その感触がその物体にも手にもないと感じる。また、初めて食べる物の味は、その食物にも舌にもないと感じる。これらの感覚はどこか別の所にあるように感じるのである。それは事実そうであり、構想力がこれらの感覚を、手、舌、物体などの位置に位置づけるのである。感覚は経験的な感覚器官(五官)とは別個に生じ、構想力が後からこれらの器官やその対象(感覚をもたらずと常識的に考えられている物)の位置に感覚を位置づけるのである。このような構想力の作用は意識されることが稀であり、我々は最初から

五官を通して感覚していると錯覚してしまう。しかし五官は本来感覚とは無縁であり、すでに述べたように、我々の身体も構想力の産物なのである。心（魂）が感覚し、その感覚は身体の純粹形態によって把握され、その他すべての感覚もこの身体と関係づけられるのであると思われる。構想力の再生産的印象がなければ、目は物を見ず、耳は音を聞かず、手は触覚を持たず、舌は味を感じず、鼻は匂いをかがないであろう。感覚が消滅しているからである。構想力は原初的感覚を身体それぞれの部分に位置づけるだけでなく、その後も同じように感覚を配備する。原初的感覚がどのような場合に現れるのか、つまりどのような場合に我々は対象から触発されるのか、これは経験的にしか究明できない事柄ではある。しかしそれにもかかわらず、触発する対象は現象の背後にある物自体であり、すべての感覚（五官感覚にかぎらず）は触発された意識主体からのみ生ずると言えるのではないかと思われる。我々が感覚に触発されると感じるのは、物自体に触発されているということであって、それ以外の事ではないであろうと思われる。

構想力はカテゴリーにしたがわなければ、単に感性に属し、その場合、すべての現象は混乱し、連想の法則などというものももちろん生じえない。原初的感覚（これは構想力の産物ではない）を別として、再生産的印象、純粹空間はカテゴリーにしたがって生じ、ある経験的概念のもとに（原初的感覚共々）綜合統一（結合）される。カテゴリーは、対象の直接的表象（原初的感覚）とそれをさらに対象とする間接的な様々な直観的諸

表象（純粹ならびに経験的な）をある経験的概念のもとに結合し、一つの直観的对象を我々に提示する。そしてこの結合は、その経験的概念における統覚の統一に基づいている。把握の綜合は、我々にある直観的对象を提示するが、それはその対象の概念における統覚の統一に基づいているのである。超越論的統覚は、それ自体、カテゴリーを介して直観の多様を綜合統一する根拠であるが（綜合は構想力の綜合である）、この統一は、統覚自体の統一を伴って初めて遂行されるのである。

以上、我々はカテゴリーが経験の可能性にとつていかに重要であるかを見てきた。カテゴリーは、直観の多様を綜合統一する機能であるが、それは基本的には、カテゴリーにしたがって多様が産出されるという意味においてである。本稿では、カテゴリーや原則について詳しく検討する余裕はなかったが、初めに述べたように、構想力がカテゴリーにしたがわなければ（カテゴリーによって現象が構成されなければ）経験が可能でないということとは、少なくとも明確に指摘しえたのではないだろうか。そしてこれが本稿の主旨であった。経験の可能性のために、構想力（なかならずその再生産作用）がカテゴリーにしたがうということがきわめて重要である。もっとも、経験的認識の可能なためにはカテゴリーだけでは未だ不十分であり、経験的認識に超越論的对象（物自体）との連関を与える根拠が必要である。この連関に基づいて経験の対象が構成されているからである。しかし、この問題は本稿では扱えない。

注

* カント『純粹理性批判』からの引用は、第一版をA、第二版をBとし、頁数をアラビア数字で示す。邦訳は、理想社「カント全集」の原訳を参考とした。

- (1) B 1
- (2) A 90, B 122 f.
- (3) A 90, B 123
- (4) A 100 f.
- (5) A 112
- (9) A 112
- (7) A 111
- (8) 夏目漱石『倫教塔』冒頭を参照(たとえば、岩波文庫、改版(六頁))。
 - (9) A 143, B 182
 - (10) A 168, B 209 f.
 - (11) A 168, B 209
 - (12) A 167 f., B 209
 - (13) A 143, B 182
 - (14) A 19 f., B 34
 - (15) B 207
 - (16) B 208
 - (17) B 207
 - (18) A 93, B 126

- (16) A 93, B 126
- (20) A 93, B 126
- (21) A 108
- (22) A 109
- (23) B 207
- (24) A 109
- (25) B 149
- (26) A 101
- (27) A 20 f., B 35

(28) 『純粹理性批判』において、全体が部分に先行する唯一全体空間と、全体が部分によって合成される外延量としての空間という二種類の空間が出てくるということに関しては、量義治『カントと形而上学の検証』(1984) 一六六―一八〇頁を参照されたい。

(29) B 160. なお、本文中にも述べてあるように、この引用に現れる「直観の形式」と「形式的直観」の区別は、この引用の後の文章から察するに、時間にも適用されると考えられる。本稿では、この区別に沿っての時間論は展開しえなかったが、以前に若干の考察を試みたことがある。拙稿「カントにおける直観と概念」(筑波大学哲学・思想学会編「哲学・思想論叢」第八号、一九九〇年、三三―四四頁)の時間論に関する部分を参照。

- (30) B 208
- (31) A 20, B 34

- (32) A 99
 (33) A 162, B 203
 (34) A 163, B 204
 (35) 「直観の形式」としての空間も外延量としての空間も、感覚とは別個に生じている。したがって純粹空間として生じているのであるが、現実には感覚を含まざるをえない。それゆえ、純粹直観はそれ自体で（感覚を含まずに）直観されることは不可能であり、そのような（感覚を含まない）ものとしては思考の対象であるにすぎない。けれども、純粹直観はあくまでも直観なのであって、現実には感覚を含んで直観される（経験的直観として直観される）ということである。
- (36) A 25
 (37) カントは「直観の形式」や「形式的直観」を厳密に区別して用いることは少ない。「形式的直観」を「外的直観の形式」と呼んでいる場合もある（A 429, B 457）。外延量としての空間も含めて、感性的直観の形式であり、純粹直観であるこれら三者があまり区別されずに語られるのも当然であろう。
- (38) A 78, B 103
 (39) A 120
 (40) A 141, B 180
 (41) B 151
 (42) B 152

- (43) B 141, B 152
 (44) A 121
 (45) A 125
 (46) A 167, B 209
 (47) A 102
 (48) A 141, B 181
 (49) A 97
 (50) 「直観の形式」は構想力の産物ではない。
 (51) A 22, B 37
 (52) 本稿では、第二節などで「印象」という言葉をやむをえず日常的な意味で用いている場合もあるが、印象は厳密には本来空間性を持たない（再生産的印象も同様に空間性を持たない）。印象は感覚印象なのであるから、感覚と同様本来空間と関係がないのである。
- (53) B 162
 (54) A 104
 (55) A 109
 (56) A 109 f.
 (57) 本稿では、一貫して物自体による触発（物自体が心を触発する）を採っている。したがって本稿では、原初的感覚はその背後に物自体触発があるため我々の心を触発するが、再生産的感覚は触発しないという立場を採っている。けれども、再生産的感覚が我々の心を触発するかどうかはもう一度考えてみる必要があると考えている。つまり、カント

がそのような場合にも「触発」という表現を用いていなかったか検討してみる必要があると考えている。しかし、再生産的感觉が我々を触発するかしないかという問題は、本稿の理論構成には影響はないと言うことができる。原初的感觉が物自体触発によって生じ、再生産的感觉が構想力によって生ずるということに変わりはないからである。

(もりもと・よしひろ 放送大学非常勤講師)